

## あ と が き

2020年夏にわが国で開催される平和の祭典、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が目前に迫ってきた。おもてなしの心で迎えたいものである。通勤時の車窓から見えるクレーンが林立した工事中の新国立競技場も、外観からは大方でき上がっているように見受けられる。

あの巨大な構築物の中で大勢の人が額に汗して働いている。ご苦労様である。果たして工事従事者の人数は十分なのだろうか。責任感と過重労働から若い現場監督が自ら命を絶った痛ましいニュースもあった。残念なことである。昨今多くの企業、特に中小企業は、若い世代の働き手が不足している。加えて、採用の厳しさも増している。そして、その傾向は年々強まってきている。

積年の少子高齢化の影響が顕著となってきた。マスコミ等で大きな社会問題として取り上げられた過労死問題も労災認定には時間を要するが、認定後、事業主責任が問われることになる。結果として組織の見直し、個人の業務量の見直し等が生じることになる。必然的に若年職員の新規採用となれば、少子高齢化の影響が全く関係ないとは言えないだろう。

遅きに失した感はあるが、ここにきて国も、働く者の立場に配慮した新たな法律「働き方改革を推進するための法律」を国会で可決、成立させた。これに伴い、「労働基準法」と「労働安全衛生法」等の一部が改正された。果たして働く者の労働環境は国の思惑とおりに改善されるのだろうか。

さて、公益財団法人として労働衛生等に取り組んでいる総合検査、健(検)診機関を取り巻く事業環境はどうだろうか。相も変わらず、市場経済原理を理由に無意味な競合のもと料金の引き下げが行われている。こうした状況が生じた背景には、精度管理等を二の次とする一部の代行機関の跋扈も影響しているものと思われる。職員の生活を守り、必要経費を支払い、彼らはどのように法人運営を行っているかと考えずにはいられない。果して、健(検)診機関の仕事が営利企業の事業と同列ではないことを理解しているのだろうか。何かの経済誌に、徹底した実践主義者である二宮尊徳の言葉「道徳なき経済は罪である・経済なき道徳は寝言である」と、実業界で指導的役割を果たした実業家の渋沢栄一翁が提唱した「道徳と経済は一にして二に非ず」が取り上げられていた。いずれも肝に銘じておきたい。

健康寿命の延伸は人々の願いである。今後も役職員一丸となり、公益財団法人の名に恥じないよう、良質で精度の高い総合検査を行い、健(検)診機関であるという誇りを持ち、東京都民の健康増進ならびに予防医学の推進に貢献していく所存である。

最後に、この度2019年版年報(平成29年度活動報告・通巻第48号)を発行するに当たり、東京都をはじめとする行政当局ならびに東京都医師会、東京産婦人科医会、東京小児科医会等、関係機関の先生方のご指導ご支援に感謝を申し上げます。

2019年3月

公益財団法人東京都予防医学協会  
専務理事 小川 登